子どもとスポーツの
これから

地域が目指したい姿

朝日新聞編集委員　中小路徹

自己紹介

・中学から大学までサッカー部

・1991年入社　スポーツ部でサッカー担当

・Ｊリーグ、日本代表（ジーコジャパン）

・埼玉スタジアムにもご縁

（浦和の2006年Ｊリーグ初制覇、2007年ＡＣＬ制覇）

・2014年～　編集委員（スポーツと社会）

　子どもとスポーツ、部活動改革、暴力根絶、事故防止など、足元のスポーツ環境をみつめる

vodafone
LEAGUE

AFC CHAMPIONS LEAGUE 2007

ターニングポイント
2013年1月

・大阪市立桜宮高男子バスケットボール部主将の自死

・柔道女子日本代表の監督らによる暴力、パワハラ事件

サッカー担当→競技を横断する視点

「なぜ暴力的指導が起こるのか」

「なくしていくためには何が必要なのか」

問題提起の旗を揚げ続け、現場を歩く

→数珠つなぎで、様々な課題が現れる感覚

「部活動の在り方は……」

「子どものスポーツ環境は……」

「スポーツ行政は……」

本日、お話させていただくこと（取材者からの視点として）

■スポーツ離れ？　子どものスポーツの今

■暴力的指導の現在地

■「子どもが主役」を考える　地域ができること

■保護者の関わりを考える

■子どもにいろいろなスポーツを

スポーツ離れ？

日本中学校体育連盟（中体連）の登録人数の変化
(2003年→2022年)

■全体　77％（男子75％、女子79％）

■全生徒数は少子化で87％に

→地域・民間クラブへの加入状況を考慮する必要があるが、運動部離れ、スポーツ離れが進んでいる可能性

中学部活動、人気競技は？（男子、2003年→2022年）

バドミントン　174%
陸上　118%
ハンドボール　110%
水泳　108%
新体操　105%
バスケットボール　91%
バレーボール　91%

中学部活動、人気競技は？（女子、2003年→2022年）

軟式野球　555％

サッカー　329％

スケート　203％

陸上　104％

バドミントン　99％

卓球　94％

ハンドボール　90％

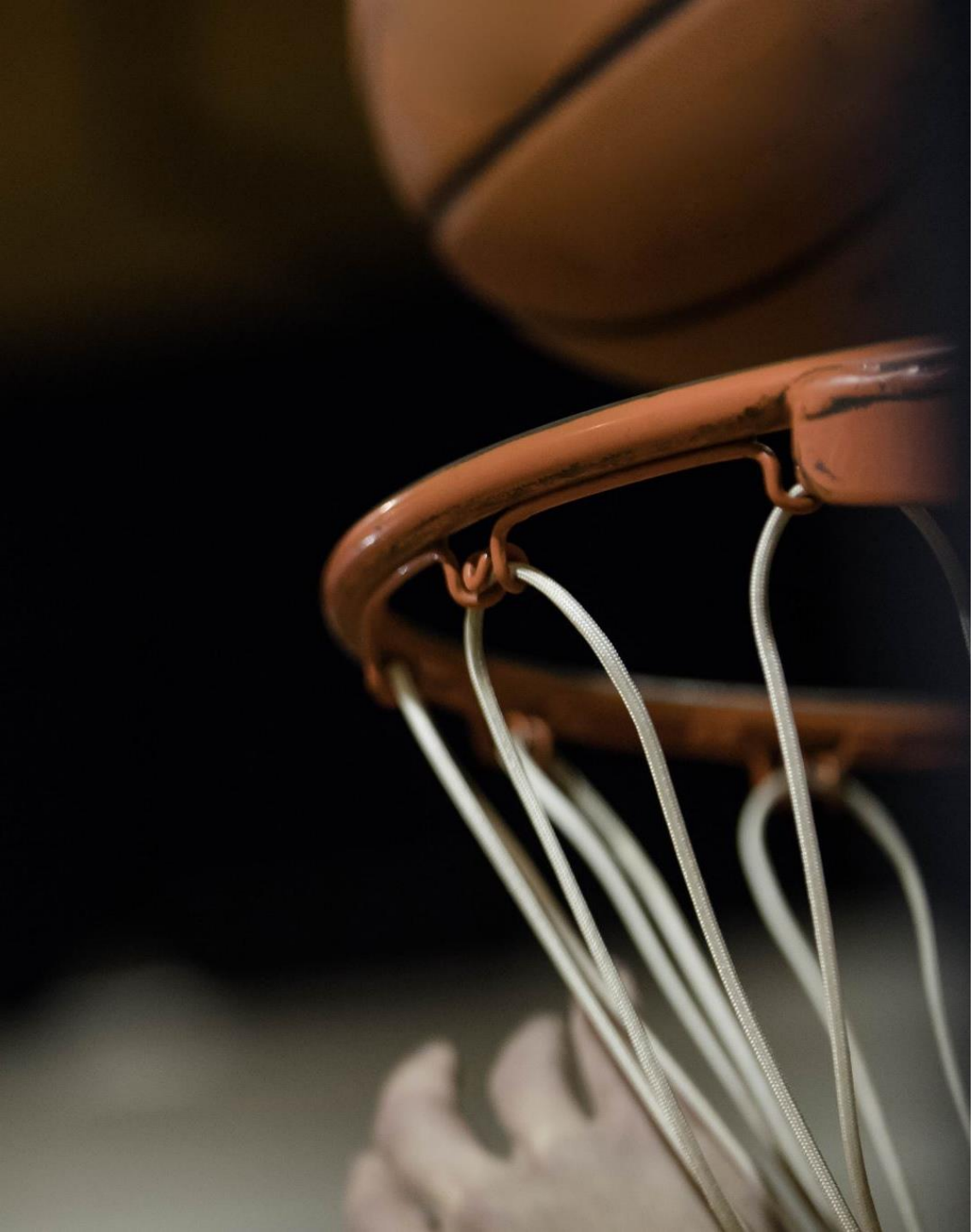
中学部活動、現状維持競技は？
（2003年→2022年）

男子卓球	88％
女子バレーボール	80％

中学部活動、不人気競技は？（男子、2003年→2022年）

サッカー　７２％
ソフトテニス　６６％
剣道　５５％
体操　５３％
相撲　５２％
スキー　５１％
柔道　４５％
軟式野球　４４％
ソフトボール　３８％
スケート　２１％

※地域クラブ所属者を考慮する必要はあり



中学部活動、不人気競技は？（女子、2003年→2022年）

バスケット　７４％

水泳　７１％

ソフトテニス　７０％

新体操　６６％

剣道　６６％

スキー５７％

体操　５３％

柔道　５０％

ソフトボール　４７％

※地域クラブ所属者を考慮する必要あり

人気、不人気、背景は……

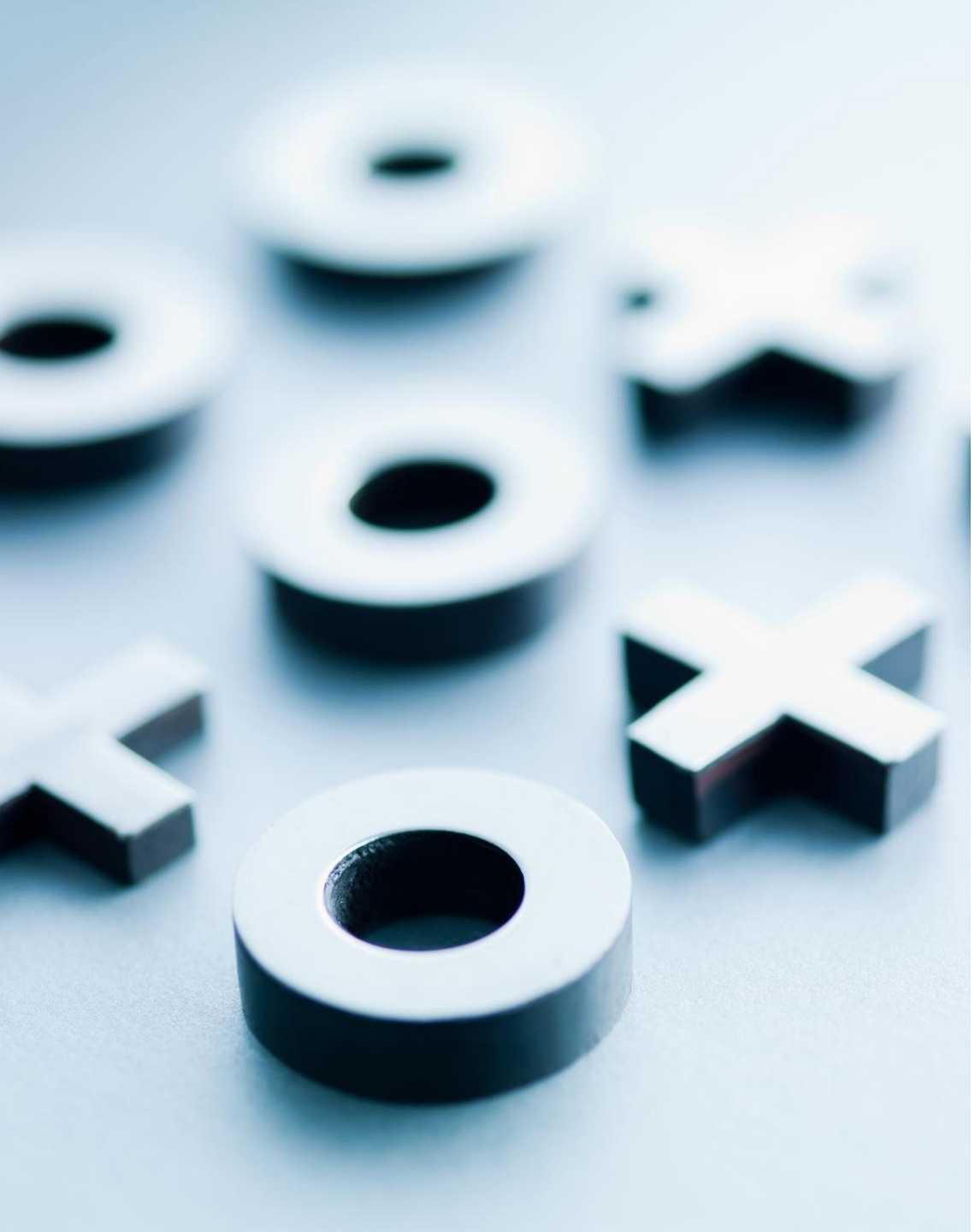
■痛い系（柔道、相撲、剣道、体操）は二の足を踏む？
安全意識の高まり？

■野球・ソフトボールは長い練習時間が敬遠される？

■伸びているのは、個人または少人数で、マイペースでできる競技。指導者主導ではない？

■国際的な競技力と人気は関係ない？

→指導の在り方を見直す材料にできないか



大事なチェックポイント
指導が暴力的でないか？

■あれから10年

・大阪市立桜宮高男子バスケットボール部主将が、顧問から受けた暴力などを理由に自死

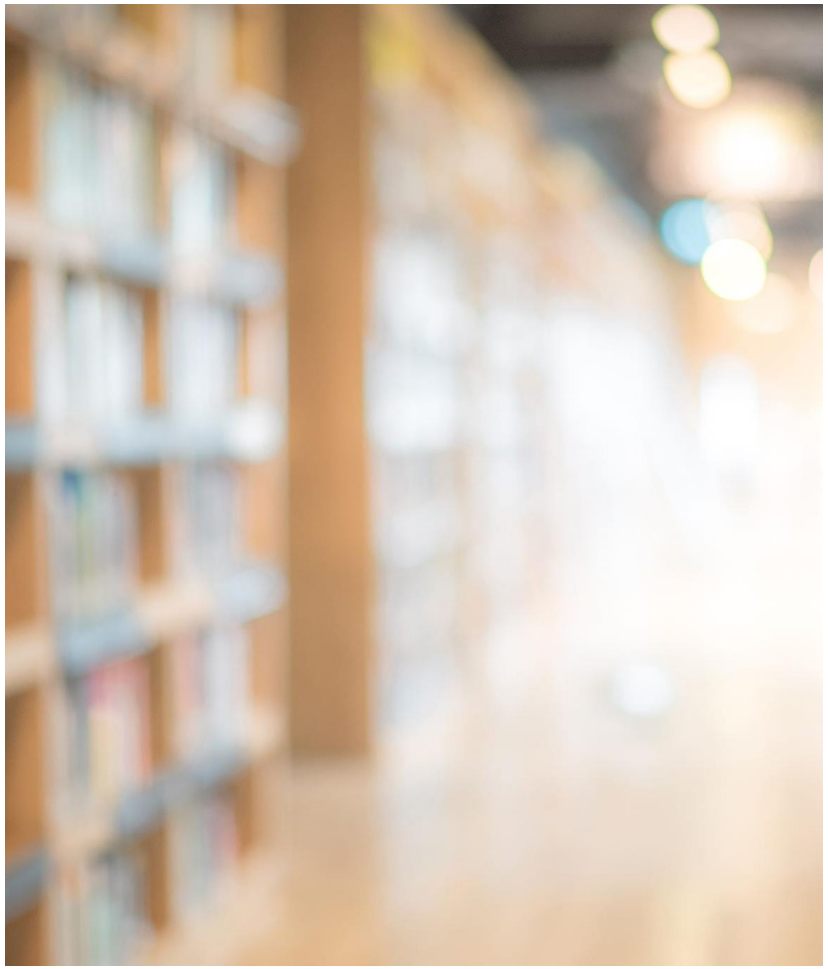
（2013年1月8日に明らかに）

・女子柔道日本代表の監督・コーチらが選手たちに暴力・ハラスメント行為をしていたことが発覚

（2013年1月31日に）

スポーツ界は暴力撲滅に動いてきたが……

22年8月　埼玉・本庄第一中剣道部顧問が暴行容疑で逮捕
22年9月　長崎・諫早市立中のバレー部顧問が体罰
22年10月　兵庫・姫路女学院高ソフトボール部で体罰
22年11月　福岡・博多高剣道部員の自死が明らかに。
　　顧問の暴力・暴言が原因
23年2月　千葉・市船橋高バレー部顧問が暴行の疑いで逮捕
23年3月　長崎明誠高柔道部顧問が繰り返し体罰
23年4月　東海大菅生高の野球部監督を暴行容疑で書類送検



暴力的指導の現在地

・昨年１２月、朝日新聞社がアンケート結果を報道

・高校までにスポーツをしていた大学生639人（5大学の協力、運動部員491人）から有効回答

　→2013年5月に報じたアンケート（3大学協力、運動部員510人から有効回答）と比較

2022122315509804.pdf - Adobe Acrobat Reader (32-bit)
ファイル (F) 編集 (E) 表示(V) 署名(S) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)
ホーム ツール 202212231550980...
1 / 1

朝日新聞 2022年12月23日 朝刊 19ページ 東京本社

姿変える体罰 撲滅なお課題

2012年12月に大阪・桜宮高バスケットボール部の主将が、顧問から受けた暴力などを理由に自死してから23日で10年。スポーツ指導における体罰の現況は――。朝日新聞社が、高校時代までにスポーツ経験がある大学生639人にアンケートしたところ、13年5月に報じた結果と比べ、体罰を受けたと答えた割合は半減し、体罰を容認する割合も激減した。暴力根絶に向けた努力は一定の成果を上げているといえる。一方で、撲滅には課題が残る。（編集委員・中小路徹）

5大学の学生639人に本社アンケート

今回のアンケートで、小中高時代にスポーツ指導者から体罰を受けたことがある、と答えたのは17%。13年のアンケートでは、33%だった。

「指導者と選手の信頼関係があれば体罰はあっていいか」と聞くと、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた容認派は、今回は14%。前回の62%から大きく減った。

「スポーツを教える側になったとして体罰を使うか」の問いにも、「使うと思う」「時と場合によって使うと思う」は、合わせて7%。これも前回の45%からかなり減った。

体罰容認派の割合について、体罰を受けたとする学生と受けなかったとする学生で比較すると、「受けた」の容認派は28%。「受けなかった」の12%より、16ポイント高かった。前回も、容認派は「受けた」の方が16ポイント高く、体罰を受けた者が肯定的に受け止める「負の連鎖」の傾向は続いてみられた。

「受けたことある」17% 半減

ただ、体罰を受けたと答えた学生に、その影響（複数回答可）を聞くと、変化が見られた。「気持ちが引き締まった」が前回の60%から36%に、「指導者が本当に自分のことを考えていると感じた」が46%から26%に下がるなど、肯定的な影響は減る傾向に。一方で、「指導者の目を気にして練習、試合をするようになった」が18%から44%、「なぜ体罰を受けなければいけないか、理解できなかった」が10%から22%になるなど、否定的な影響が増えた。

体罰問題への認識について聞くと、36%が「以前よりも改善されている」を選択した一方、「体罰は改善されたが、暴言や威圧的な指導は改善されていないと思う」も34%あった。また、体罰を受けたことがないとした学生の3%は、「たたかれたり、蹴られたりしたことはあるが、体罰を受けたとは思わない」を選択した。

なお、柔道、剣道、空手道、少林寺拳法など武道系の体育会運動部員74人で集計すると、体罰を受けたと答えたのは30%、体罰容認派は29%と、全体に比べてやや高い傾向が出た。

暴言「改善されてない」34%

人格否定で心をむしばむ権利 指導者にはない

アンケート結果（%、カッコ内は前回の数字）

■小、中、高校時代に指導者から体罰を受けましたか？
はい 17(33)▼いいえ 78(59)▼自分は受けなかったが、別の選手が受けた 5（8）

■体罰を受けたのはいつですか？（複数回答可、「体罰を受けた」の回答者のみの割合）
小学時代 41(27)▼中学時代 52(53)▼高校時代 37(70)

■指導者の体罰をどう感じましたか？ どんな影響がありましたか？（複数回答可、「体罰を受けた」の回答者のみの割合）
指導者の愛情を感じた 20(38)▼本当に自分のことを考えていると感じた 26(46)▼競技力向上に役立った 16(27)▼気持ちが引き締まった 36(60)▼チームのために体罰を受けてもしょうがないと感じた 17(21)▼なぜ体罰を受けるのかが理解でき、しょうがないと感じた 25(40)▼指導者自身が勝ちたいという気持ちだと感じた 13(20)▼競技力向上に支障をきたした 9（5）▼指導者の目を気にして練習、試合をするようになった 44(18)▼なぜ体罰を受けなければいけないか、理解できなかった 22(10)▼指導者の体罰が上級生の暴力に波及していた 6（2）▼反抗できない状況で、やり方が汚いと感じた 19（7）▼そのチーム、またはその競技をやめる一因になった 8（1）

■指導者と選手の信頼関係があれば、体罰はあってもいいと思いますか？
そう思う 5(28)▼どちらかといえば、そう思う 9(34)▼どちらかといえば、そう思わない 17(16)▼そう思わない 66(17)▼無回答 3（5）

■自分がスポーツを教える側になったとして、体罰を使うと思いますか？
絶対に使わないと思う 90(51)▼時と場合によって使うと思う 7(43)▼使うと思う 0.2（2）▼無回答 3（4）

■体罰問題について、お考えに当てはまるものに○をつけてください（今回、新設の質問）
以前よりも体罰問題は改善されていると思う 36▼体罰は改善されたが、暴言や威圧的な指導は改善されていないと思う 34▼体罰を使う指導者と使わない指導者がはっきり分かれていると思う 14▼たたかれたり、蹴られたりしたことはあるが、体罰を受けたとは思わない 3

自由記述から

「暴言も深い心の傷に」

■体罰によって強くなるといった古くさい考えは、昭和の時代で終わり。今は生徒（プレーヤー）にしっかりと寄り添って考えられる指導者が必要（男、剣道部）

■体罰は俗にいうお仕置きであり、馬で例えるならムチを与えること。それでもスピードは出るかもしれないが、それは自発的に出させているものではない（男、硬式野球部）

■暴言を吐かれ体罰を受けたことが1回だけある。その時の感情一つで言われたけど、私は今でも忘れないくらい嫌だった（女、柔道部）

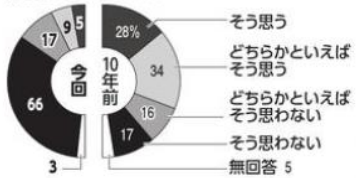
■自分は体罰を受けてから、ノリでたたくふりをされても、その記憶がフラッシュバックする。もう体罰のある指導がなくなるといいなと思う（女、少林寺拳法部）

■スポーツに限らず、体罰は絶対にあってはならないと断言できる。自分が保健体育教員になった際には、他の先生が体罰をしていたら、すぐやめさせる人になりたい（女、少林寺拳法部）

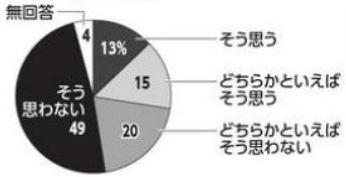
■言葉で教えれば伝わることを体で覚えさせて恐怖心を抱かせるのは本当に良くないことだと思う（女、大学でスポーツはしていない）

小中高時代、指導者から体罰を受けたことが

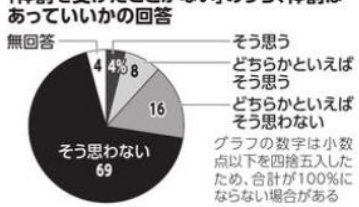
体罰はあっていいか



「体罰を受けたことがある」のうち、体罰はあっていいかの回答



「体罰を受けたことがない」のうち、体罰はあっていいかの回答



グラフの数字は小数点以下を四捨五入したため、合計が100%にならない場合がある

暴力的指導の現在地

■小、中、高校時代に指導者から体罰を受けましたか？
（かっこ内は10年前の比率）

はい　17％（←33％）
いいえ　78％（←59％）
自分は受けなかったが、別の選手が受けた　5％（←8％）

→現場の暴力は減っている

暴力的指導の現在地

■指導者と選手の信頼関係があれば、体罰はあってもいいと思う？
（かっこ内は10年前の比率）

そう思う　5%（←28%）

どちらかといえば、そう思う　9%（←34%）

どちらかといえば、そう思わない　16%（←16%）

そう思わない66%（←17%）

→体罰容認論も激減

暴力的指導の現在地

■「体罰受けた」の回答者のうち……

「体罰あっていい」13％（全体で５％）
「どちらかといえばあっていい」15％（全体で9％）
「どちらかといえばそう思わない」20％（全体で16％）
「そう思わない」49％（全体で66％）
→「負の連鎖」は依然みられる

暴力的指導の現在地

「以前よりも体罰問題は改善されていると思う」36％

「体罰は改善されたが、暴言や威圧的な指導は改善されていないと思う」34％

→暴言、威圧的指導が特に課題として浮かぶ

暴力的指導の現在地

■アンケートからみえるもの

・指導現場の暴力はある程度、減っている
　＝この１０年間の努力は実っている
　＝ただ、根絶は「道半ば」

・反暴力の啓発も進んでいる
　＝最近の発覚は、訴えやすくなり始めた反面も

・わかりづらい体罰、暴言、暴力的指導は啓発不十分

スポーツにおける暴力行為の定義

「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」
（2013年4月、日本スポーツ協会など５団体が採択）

■殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体的制裁

■言葉や態度による人格の否定

■脅迫

■威圧

■いじめや嫌がらせ

■セクシュアルハラスメント

※「罰走」も肉体的苦痛を与える目的で「体罰」

言葉の暴力で生徒が死んでいる

■２０１８年、不来方高バレー部員が自死

「顧問を務める男性教諭の叱責や暴言が、死にたいと思う気持ちを強める一因になった」（調査報告書）

■２０２０年　博多高剣道部員が自死

「貴様やる気あんのか」「特待生として責任がある」（遺族側）

■２０２１年、コザ高運動部主将が自死

「顧問から勝利至上主義に基づく過度なプレッシャーを与えられ、精神的に追い込まれいった」（第三者チーム報告書）

暴力的指導の背景

■勝利至上主義
＝スポーツの価値を「勝ち」とみている
■結果を出さなければいけないプレッシャー
■「それで自分も強くなった」の負の連鎖
　＝経験的にそれ以外の指導法がわからない
■スポーツ推薦による進学がからむ現実
■根強く残る保護者たちの暴力容認論

勝利を目指していけないのか

勝利を目指すからスポーツはおもしろい！　でも……

・「勝ち」は価値の一つ

　　→いろいろな価値を

・楽しみ、居場所として

・子どもの主体性、判断力、発言力を育む場として

　→大事にしたいのは、結果よりもプロセスでは

その指導、イエローカード？
自己チェックリスト

■子どもがプレー中、よく自分の顔色をうかがう

■子どもが意見を言ってこない

■子どもに質問すると、「はい」しか返ってこない

■気に入らない子どもを無視してしまうことがある

■試合に出しているのに、「使えない」と矛盾したことを言う

■ふんぞり返って練習や試合を見ていることがある

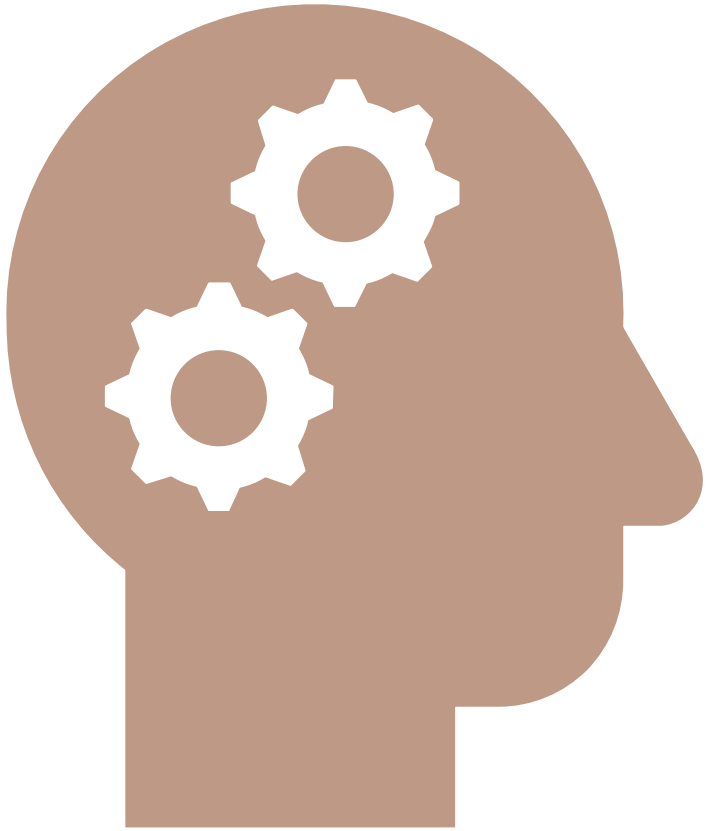
■保護者から「厳しく鍛えてやってください」と言われると意気に感じる

考えたい　「スポーツの主役は？」

・若年層の指導の落とし穴
＝厳しい指導で奮起させ、小手先の勝ち方を仕込めば結果が出る

・「勝たせてあげたい」の中に「自分が勝ちたい」はないか……
＝子どもたちから問題解決能力と批判的思考を育む機会を奪う

「子どもが主役」なら

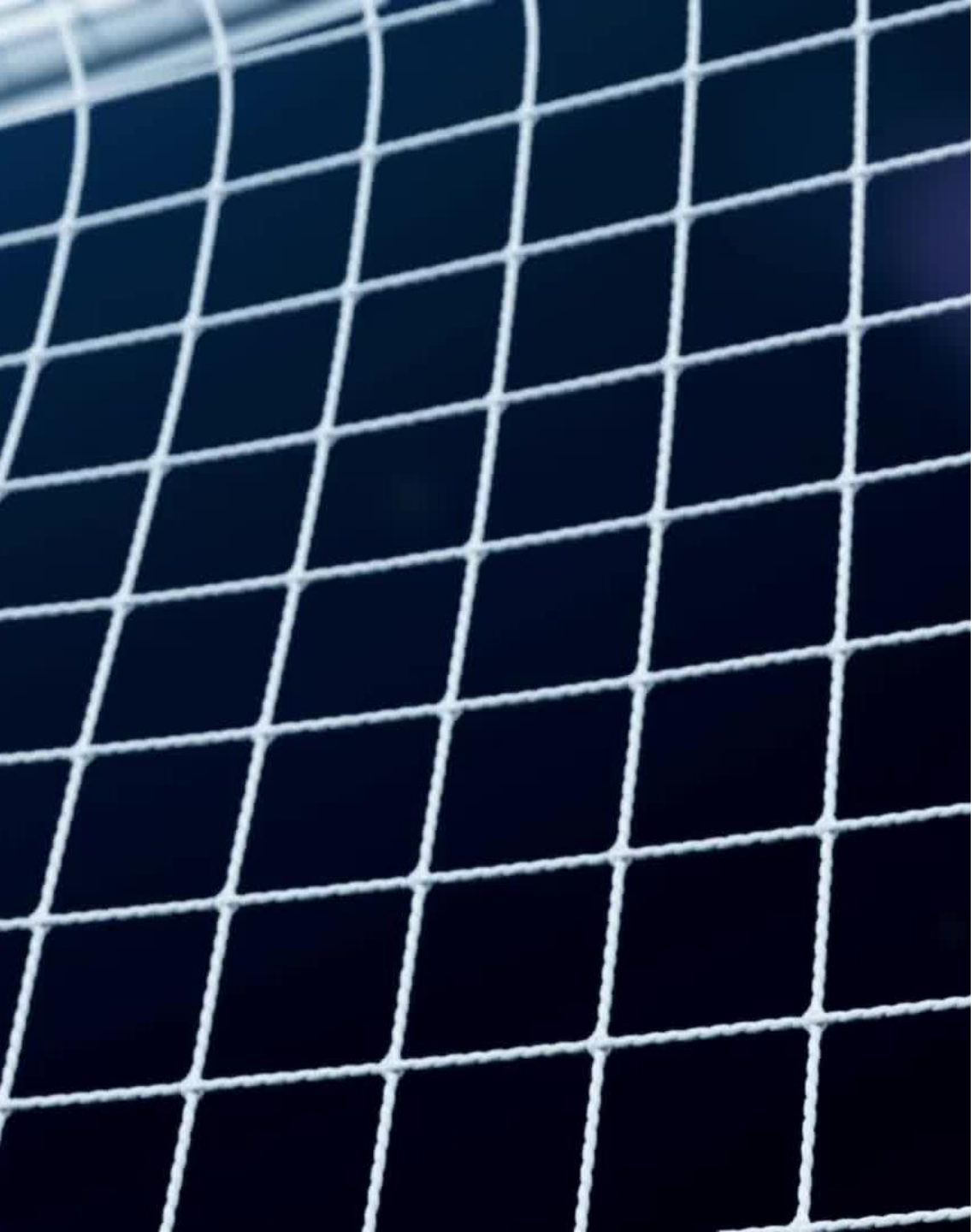


・自己判断能力、思考能力、コミュニケーション能力がアップ
→小手先の勝ち方ではない、真の強化につながる

・過度な練習、暴力的指導が自然となくなる

・スポーツ好きを増やせる（＝バーンアウト、スポーツ嫌いが減る）

※空き地での外遊びがない時代
→環境設定が必要



環境設定例①
サイレントリーグ

愛知県のスポーツマネジメントグループ「Ａｓｉａｎ　ＬＡＢＯ」主催のサッカー大会

「サイレント」＝「大人は黙る」

小学生を対象。賛同する地域クラブが集まる

環境設定例①　サイレントリーグ

・コーチ、保護者は子どもがいるエリアに入れない

・メンバー決定、交代、戦術、ウォーミングアップなど、試合に関わるすべてを子どもたちに委ねる

・行き帰りの車中でのアドバイスは控える

→現場で響くのは子どもたちの声だけ

LUZ&SOMBRA
FENG

PENALTY

GAVIC
ROBOGATO

12
6

hummel

環境設定例①　サイレントリーグ

■指導者たちの気づき

「あんなに子どもたちだけで話すんだ！」

「大人が思いもつかない配置」

「見守りが大事」

「スポーツの根本である楽しみが出ていた」

「子どもたちの思考を大人が型にはめていたのでは」

※失点パターンはカウンターが多くなる

環境設定例①　サイレントリーグ

■岡崎市の中体連、滋賀県の小学生ラグビーなどに広がり

■バレーボール元日本代表の益子直美さんが開いてきた
「監督が怒ってはいけない大会」も認知度が高くなる

環境設定例②　運営も子どもたちで

■神奈川県の伊勢原ＦＣフォレストが開く大会

４年生の大会の運営と審判を５年生が担う。

大人たちは、大会本部で見守る

運営係は、試合をするチームを誘導、記録もつける

審判には、子どもだけのベンチからのアドバイスも

環境設定例②　運営も子どもたちで

■伊勢原ＦＣフォレストの大会では合同ミーティングも。

・試合途中に良かったところ、修正点を指摘しあう

・相手を「一緒に成長していく仲間」ととらえるスポーツパーソンシップの育み

・論理的思考と発言力の育み

PENALTY
molten
HARU

PENALTY
PENALTY
Ginga Brasil

13
FCO
37
FCO
6
FCO
18
FCO

「子どもが主体」の環境設定は

地域やコミュニティーでできる取り組み

脱勝利至上主義
競技団体の模索

■全日本柔道連盟が2022年、全国小学生学年別大会を廃止

「行き過ぎた勝利至上主義が散見される」

子どもに無理な減量、指導者や保護者が審判に汚い言葉

■日本バスケットボール協会は2018年から、全国ミニバスケットボール大会を優勝チームを決めない交歓大会に

「大人はサポート役というマインドを」

■日本スポーツ少年団も検討中

保護者の負担を考える

スポーツ少年団＝保護者のサポートは必要

対価を払い、すべてを委ねられる民間クラブとは違う

地域住民を含めて団を支える「母集団」は理想的

保護者の負担を考える

■笹川スポーツ財団の調査（2021年）

小学生の子どもがスポーツをする母親2368人から有効回答

関与度を聞くと、母親がメイン

・ユニホームや練習着の洗濯	母親82％、父親18％
・子どもの送迎	母親83％、父親48％
・練習の付き添い・見学	母親65％、父親36％
・自主練習につきあう	母親31％、父親27％

保護者の負担を考える

母親への関与の偏り→「楽しみではなく、義務に」
ジェンダー不平等の問題？

少年団が広がった1960年～80年代は専業主婦が多い時代
→でも、今は……
女性の生き方や家庭の在り方が多様化
以前のままではゆがみが出る

保護者の負担を考える

■「イメージ先行」も

子どもがスポーツをしない理由(笹川スポーツ財団)

「送迎や付き添いの負担が大きいから」54％

「係や当番の負担が大きいから」48％

子どもがスポーツをする母親に、サポートについてのやりがいを質問→「やりがいがある」が約８割。

保護者の負担を考える

■男性は審判やお父さんコーチなど、競技に関わる部分を楽しみ、女性は周辺の雑務を担う立場→「男性は楽しみ、女性は義務」の隔たりを認識する必要性

■実際の負担がどうかより、「当番などで保護者の負担が大きい」というイメージができあがり、子どものスポーツの機会が狭められている可能性

保護者の負担を考える

■サポートは必要。見直せるのは…

・練習が無用に長くないか
・レギュラーの子とそうでない子の親に格差がないか
・子どもができることはする
・父親が参加できる雰囲気をつくる
・「やらない＝マイナス」ではなく、「やる＝プラス」の発想
・平等主義ではなく、やりたいことをやってもらう
・積極的に関わる人には、何らかの恩恵を
・「当番」ではなく、「サポート」の呼び名？

全日本軟式野球連盟の通知（6/6）

■学童チームへの保護者参加についての考え方

・その家庭ごとの考えがあることを理解し、話し合う

・今までの「当たり前」を見直す

・役を担わないと子どもが使われない、という誤解を生まない

・伝統あるチームも「ずっとこうやっている」と決めつけない

子どもにいろいろな
スポーツを

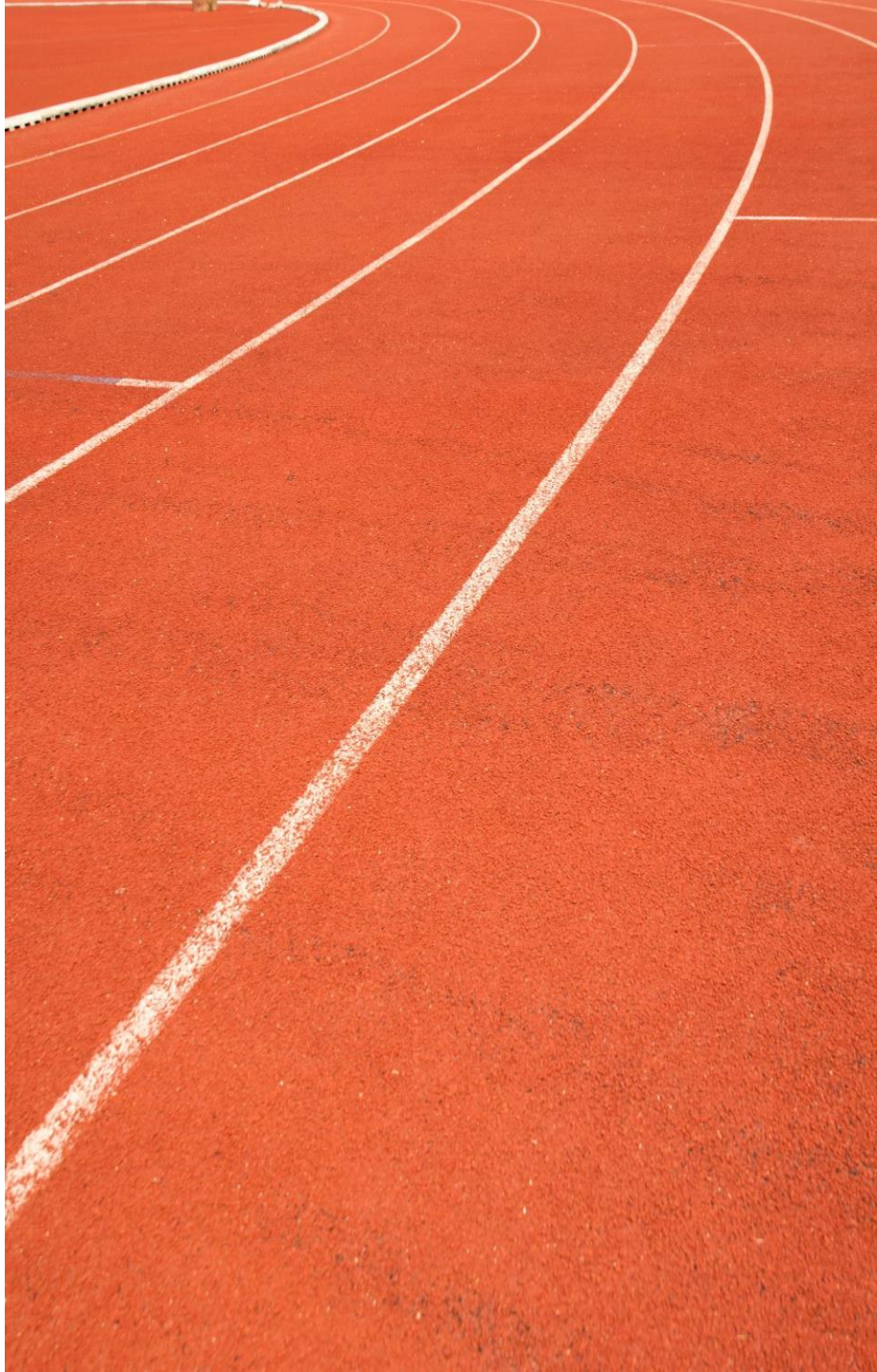
■人間は幼少期に日常の生活や遊びを通して、36種類の「基本的な動き」を習得

・体のバランスを取る＝立つ、回る、乗る

・体を移動させる＝走る、はねる、のぼる

・物を操作、他者を扱う＝押す、投げる、掘る

　→「ゴールデンエージ」と呼ばれる10～12歳ごろに、基本的な動きを「発展、応用させる能力」が発育



子どもにいろいろな
スポーツを

とちぎスポーツ医科学センター長の池田達昭さん
（元国立スポーツ科学センター）

「何をやらせてもうまくできる選手と、特定の動きがぎこちない選手がいる」

「それは『基本的な動き』と、それらを『発展、応用させる能力』を、子どもの時に獲得できているかどうかの違い

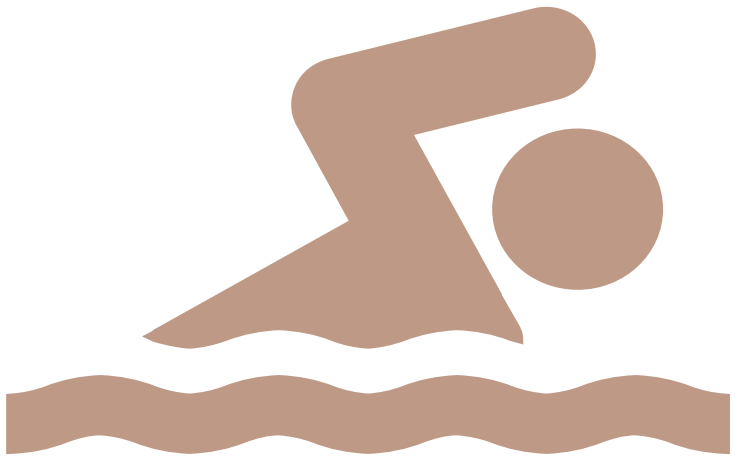
→多様な外遊び、動きをしていることが望ましい

子どもにいろいろなスポーツを

とちぎスポーツ医科学センター長の池田達昭さん
「競技によって特殊な動きが求められる」
フィギュアスケートや体操の「空中で回る動き」
→小学生低学年から専門的な練習が必要

テニス、卓球などラケットを介する動き
サッカーのボールを蹴る動作
バスケットボールのドリブル
競泳の水をキャッチする感覚
→早い時期の専門的な練習にふさわしい

子どもにいろいろなスポーツを



とちぎスポーツ医科学センター長の池田達昭さん

「ただし、幼い頃から専門的な練習をしてきた選手の中に、ある程度から頭打ちなり、練習量が増えるとけがも増える事例がある」

＝「その競技しかやってこなかったことで、他の基本的な動きが獲得されていない、動きの応用や転化ができない」

→「逆に、大人になって伸びる選手やレベルの高いところからさらに伸びる選手は、子どもの頃に多様な遊び、運動をしていた」

子どもにいろいろなスポーツを

複数スポーツを楽しめる環境、雰囲気を（一つのことをやり通す美徳より）

・将来の競技力向上のために

・生涯スポーツの素地につなげるために

・燃え尽き症候群を防ぐために

・特定の部位を使いすぎることによるけがを防ぐために

・少子化の中、各競技が人口を維持し、共存するために

ご静聴ありがとうございました

朝日新聞・中小路徹